島根県水産技術センター　漁況情報　平成 23 年 2 月 25 日発行

トビウオ通信　（H23 第２号）

http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/　　（TEL 0855-22-1720）

≪平成 22 年（2010 年）の島根県漁業の動向≫

県の漁獲統計システムにより集計した県下漁業協同組合の漁獲統計資料（属人）などから、平成 22 年（1～12 月）の島根県漁業の動向を取りまとめました　（海面漁業・漁船漁業のみ）。

全体 ・・・ 漁獲量は平年並み、生産額は平年を下回る

平成 22 年の島根県（属人）の総漁獲量は 12 万 1 千トン（平年比 103%）、総生産額は 177 億円（平年比 88%）でした（表 1、図 1、2）。近年、操業隻数が減少傾向にあるなか平年と変わらない漁獲量を市場に供給できたことは漁業者の努力の賜でしょう。しかしながら、生産額は、総生産額も漁業種類ごとの生産額も平年を下回っており、長引く不景気の影響による魚価の低迷等が影響しているものと思われます。

次に、漁業種類別でみると本県の基幹漁業であるまき網漁業（生産額ベースで全体の 34%）、沖合底びき網漁業（同 13%）、小型底びき網漁業（同 12%）は 1 隻（船団）あたりの漁獲量、生産額ともに平年並み～平年を上回る状況でした。沿岸漁業では定置網（同 11%）とイカ釣り（同 5%）は平年を下回る漁況でしたが、釣り・延縄（6%）は平年並みでした。（詳細については後述します。）

魚種別でみると（図 3）、漁獲量の上位 5 魚種はマアジ（2 万 9 千トン）、カタクチイワシ（1 万 7 千トン）、ブリ（1 万 5 千トン）、サバ類（1 万 1 千トン）、ウルメイワシ（1 万トン）で、この顔ぶれは平年と大きく違いはありません。これらのうちカタクチイワシ（漁獲量の平年比 138%）、ブリ（同 236%）、ウルメイワシ（同 163%）は平年を上回る漁況でしたが、マアジ（同 85%）、サバ類（同 62%）は平年を下回りました。

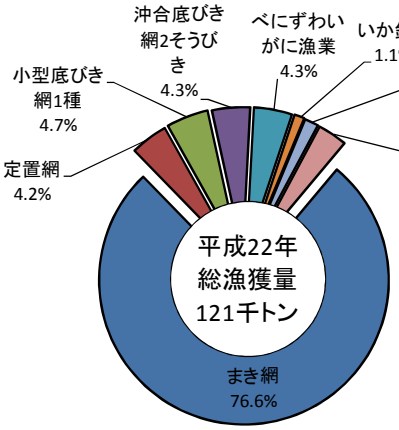

図１　平成 22 年の島根県の総漁獲量の漁業種類別内訳

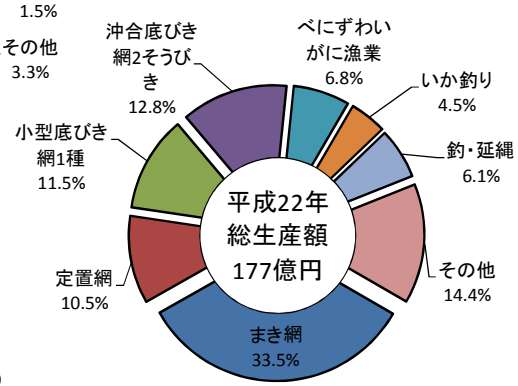

図２　平成 22 年の島根県の総生産額の漁業種類別内訳

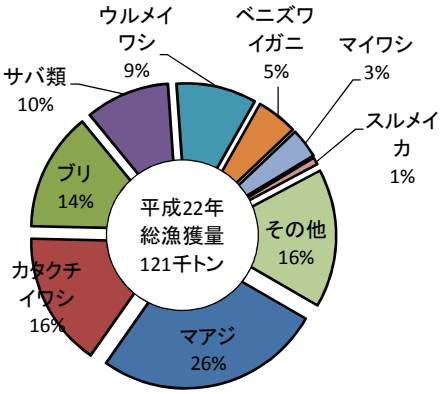

図３　平成 22 年の島根県の総漁獲量の魚種別内訳

＜文中の語句説明＞

☞ 平成 22 年の漁獲量・生産額は県下全地区、全経営体を対象に集計していますが、前年・平年は一部地区（松江市、湖陵、多岐、温泉津、江津、知夫）と一部経営体（実質的に県外を根拠にしているまき網船団と沖合底びき網漁船）を除いた数値で集計しています。

☞ 「前年」は平成 21 年の数値、「平年」は過去 5 年（平成 17 年～21 年）、沖合底びき網漁業のみ過去 10 年（平成 12 年～21 年）の平均値を指します。

☞ 平年との比較は、平年比 110%以上は「平年を上回る」、平年比 90～110%は「平年並み」、平年比 90%以下は「平年を下回る」としています。

まき網漁業 ・・・ 中型まき網は、1 船団あたりの漁獲量は平年を上回り、生産額は平年並み

本県の基幹漁業の一つである「まき網漁業」には中型まき網や大中型まき網などがあります。これらは主にマアジ、サバ類、イワシ類などの浮魚（うきうお）を漁獲対象としています。

まき網漁業全体の平成 22 年の漁獲量は 9 万 2 千トンで島根県全体の 8 割を、生産額は 59 億 1 千万円で 3 割を占めました。このうち大半を占める中型まき網の漁獲量は 7 万 3 千トン（平年比 108%）、生産額は 45 億 2 千万円（平年比 86%）でした（図 4）。ただ、中型まき網の船団数は集計対象期間である平成 17 年以降は 16 船団から 12 船団にまで減っており全体量・金額では単純に比較できないため、1 船団あたりでみると総漁獲量（平年比 117%）は平年を上回り、総生産額（同 92%）は平年並みでした。

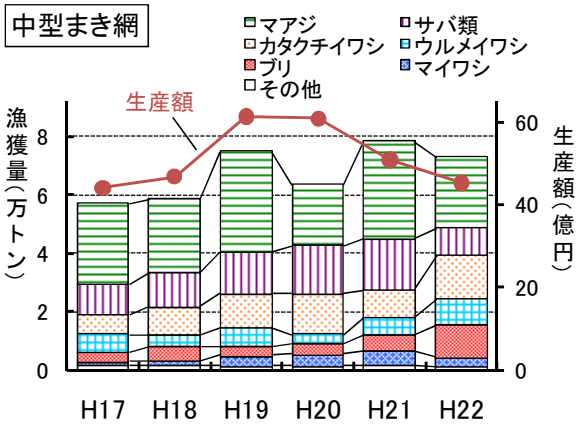

図４　中型まき網による魚種別漁獲量および生産額の推移

魚種別の漁獲量では、全体の 33%を占めた主力のマアジは春先の低水温により来遊が遅れた影響を受け低調な漁況に終わりました（平年比 85%）。カタクチイワシ（同 145%）、ウルメイワシ（同 172%）、ブリ（同 283%）は平年を上回りました。特にブリは 8 月～11 月にかけて多獲され、漁獲量は近年では例のない 1 万トンを超えました。一方、サバ類（同 66%）は主漁期となる秋以降漁獲が伸びず平年を下回りました。

沖合底びき網漁業 ・・・1 船団あたりの漁獲量は平年を上回る、生産額は平年並み、長期的には増加傾向

沖合底びき網漁業（2 そう曳き）は 2 隻の漁船で網を曳き、カレイ類、アカムツ（ノドグロ）など海底付近に生息する魚介類を漁獲対象としています。平成 22 年の漁獲量は 5 千 2 百トン（平年比 94%）、生産額は 22 億 6 千万円（平年比 87%）でした（図 5）。本漁業の船団数は集計対象期間である平成 12 年以降で 12 船団から 7 船団にまで減りました。同じ条件で比較するため 1 船団あたりでみると漁獲量は 637 トン（平年比 116%）で平年を上回り、生産額は 2 億 9 千万円（同 107%）で平年並みでした。平成 12 年以降の動向をみても、長期的にはやや増加傾向にあるといえます（図 6）。

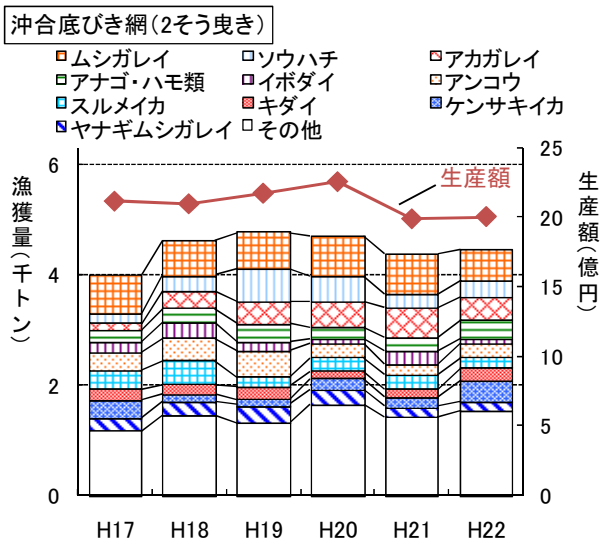

図５　沖合底びき網漁業（2 そう曳き）による魚種別漁獲量および生産額の推移

魚種別の動向では、アナゴ・ハモ類（平年比 121%）、アカガレイ（同 134%）、ケンサキイカ（同 131%）、キダイ（同 113%）は平年を上回りました。特にケンサキイカは秋以降好漁が続き、平成 18 年以来の豊漁となりました。また、ムシガレイ（同 90%）は平年並み、ソウハチ（同 80%）、イボダイ（同 43%）、アンコウ（同 75%）、ヤナギムシガレイ（同 60%）、スルメイカ（同 65%）は平年を下回りました。

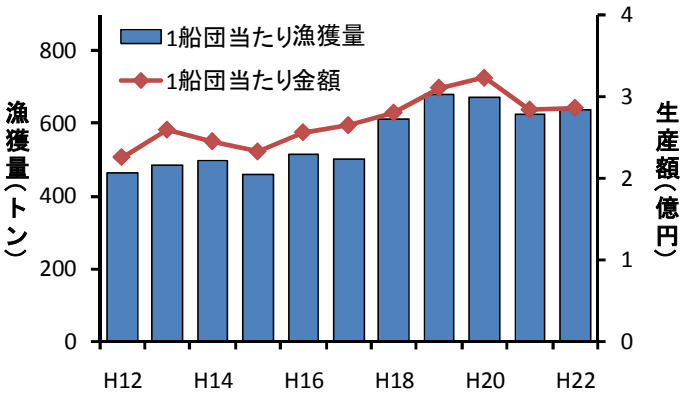

図６　沖合底びき網（2 そう曳き）1 船団あたりの漁獲量・生産額の推移

小型底びき網漁業１種 ・・・ １隻あたりの漁獲量、生産額とも平年並み

小型底びき網漁業１種は、１隻の漁船で「かけまわし」と呼ばれる方法で操業し、カレイ類、ニギス、キダイなど海底付近に生息する魚介類を漁獲対象とします。平成 22 年の漁獲量は５千７百トン（平年比 102%）で、生産額は 20 億３千万円（平年比 93%）でした（図 7）。本漁業の操業隻数は廃業により減少傾向にあり、平成 17 年以降で 58 隻から 53 隻まで減りました。同じ条件で比較するため１隻あたりでみると漁獲量は 105 トン（平年比 107%）、生産額は３千８百万円（同 98%）でともに平年並みとなりました。

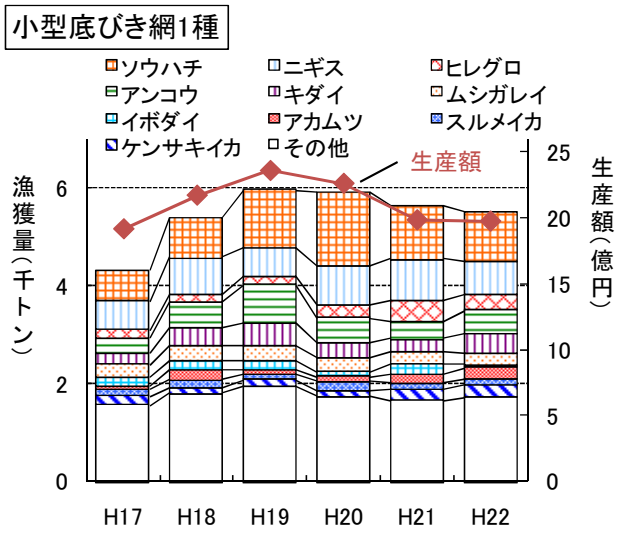

図７　小型底びき網漁業１種による魚種別漁獲量および生産額の推移

魚種別の動向では、キダイ（平年比 120%）、アカムツ（同 193%）、ケンサキイカ（同 160%）、ヒレグロ（同 138%）が平年を上回りました。特にケンサキイカは秋漁が好調で、平成 17 年以降で最高値となりました。また、ソウハチ（同 99%）、ニギス（同 93%）、アンコウ（97%）は平年並み、ムシガレイ（同 82%）、イボダイ（同 28%）、スルメイカ（同 79%）は平年を下回りました。今年は操業に支障をきたす大型クラゲの来遊がほとんどなく、これを餌とするイボダイの来遊が少なかったようです。

定置網漁業 ・・・ 漁獲量・生産額ともに平年を下回る

定置網漁業は（大型定置網・小型定置網・底建網）は魚類の通り道に網を張り、網に入り込んだものを漁獲する漁法で、マアジ、ブリ、サバ類、スルメイカなどが漁獲対象となります。平成 22 年の漁獲量は５千トン（平年比 83%）、生産額は 18 億６千万円（同 88%）で、ともに平年を下回りました（図 8）。また、定置網漁業の全漁獲量の約８割を占める大型定置網の１ヶ統あたりの漁獲量、生産額をみても、ともに平年を下回りました。

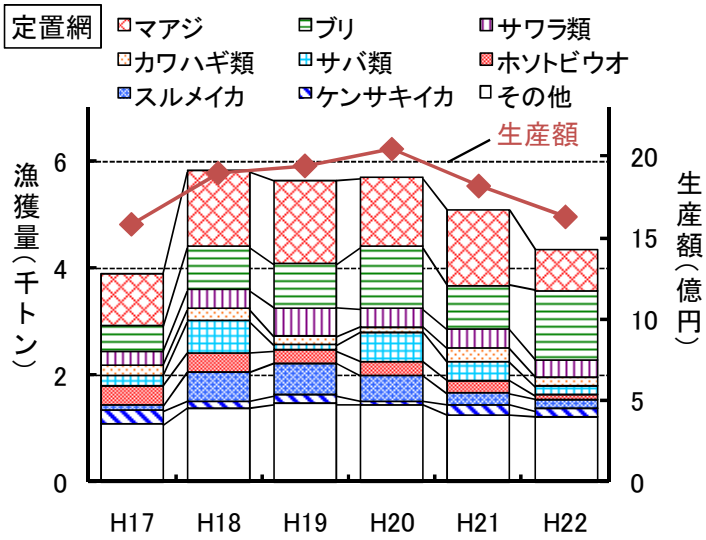

図８　定置網漁業による魚種別漁獲量および生産額の推移

地区別の漁獲動向をみると、出雲地区ではブリが平年の１．５倍の漁獲があり、全体の 31%を占め好調でした。一方、マアジ、サバ類、ホソトビウオ、スルメイカが低調であったため、総漁獲量は平年を下回りました（平年比 79%）。

石見地区でもブリが好調で平年の１．６倍の漁獲がありましたが、マアジ、サバ類の低調な漁況が大きく響き、総漁獲量は平年を下回りました（同 72%）。

隠岐地区でもブリが好調で平年の１．９倍の漁獲がありましたが、主力のスルメイカ（同 65%）やホソトビウオ（同 27%）などが低調で、総漁獲量は平年並みに留まりました（同 100%）。

釣り・延縄 ・・・ 漁獲量は平年並み、生産額は平年を下回る

釣り・延縄は、海況や季節に応じて様々な仕掛けを駆使して魚を釣り上げる漁業です。

平成 22 年の漁獲量は 1 千 9 百トン（平年比 107%）、生産額は 10 億 8 千万円（平年比 80%）でした（図 9）。本漁業では漁獲量は比較的安定していますが、生産額は減少傾向にあります。

地区別の漁獲動向をみると、出雲地区では主力は何と言ってもブリですが、平成 22 年の漁獲量は 480 トンで全体量の 63%を占めました。主力のブリが平年比 135%と好調であったため総漁獲量も平年を上回りました（同 111%）。

石見地区ではメダイ、ブリ、サワラ類、アマダイ、クロマグロ（ヨコワ）が主な漁獲対象です。平成 22 年はサワラ類やアマダイが不調でしたが、メダイ、ブリが好調であったため、総漁獲量は平年を上回りました（同 113%）。

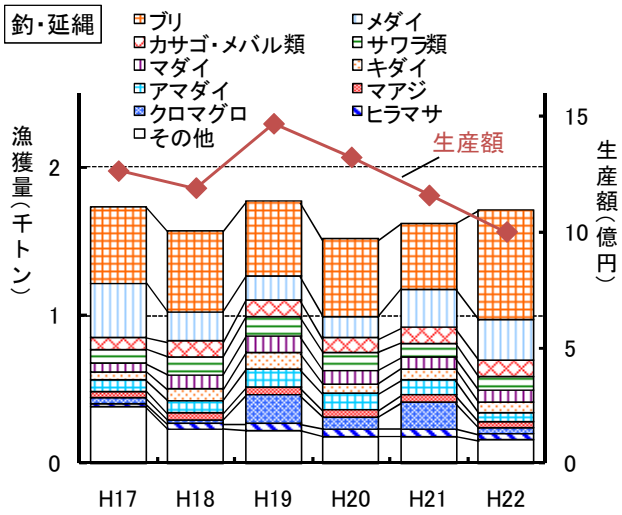

図９　釣り・延縄による魚種別漁獲量および生産額の推移

隠岐地区ではメダイ、カサゴ・メバル類、ブリ、キダイ、クロマグロ（ヨコワ）が主な漁獲対象です。平成 22 年はキダイ、ヨコワの不調が大きく響き総漁獲量は平年を下回りました（同 90%）。

イカ釣り ・・・ スルメイカは不調、ケンサキイカは好調

イカ釣り漁業は名前の示すとおりスルメイカやケンサキイカなどのイカ類が漁獲対象で、本県では夜に漁火によりイカを集める夜釣りが主流です。また、漁船の総トン数により「イカ釣り 5 トン未満」「小型イカ釣り（5 トン以上 30 トン未満）」「中型イカ釣り（30 トン以上 139 トン未満）」に区別されます。

平成 22 年の漁獲量は 1 千 4 百トン（平年比 55%）、生産額は 7 億 9 千万円（平年比 65%）で、ともに平年を下回りました（図 10）。これはスルメイカの漁獲量（350 トン）が平年比 21%と大きく減少したことによります。本県では冬季～3 月に産卵のため本県沿岸を南下する冬生まれ群、3 月～夏季に摂餌のため北上する秋生まれ群が主要な漁獲対象となります。ところが平成 20 年以降、回遊経路が沖合となる傾向が強く、スルメイカの不漁が続いています。

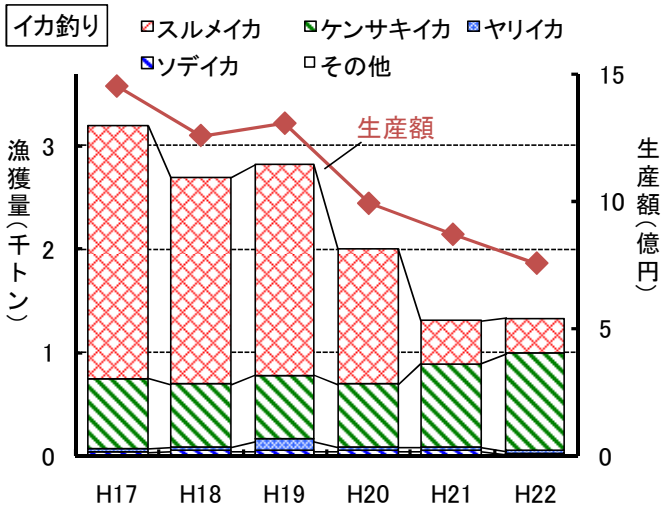

図１０　イカ釣りによる魚種別漁獲量および生産額の推移

一方、ケンサキイカは秋漁が好調に推移し、漁獲量は 980 トンで平年を上回りました（平年比 140%）。ケンサキイカは平成 18 年以降、春～夏に獲れる大型のケンサキイカ型は減少傾向にありますが、秋に獲れる小ぶりなブドウイカ型は増加傾向にあり、スルメイカの不振を穴埋めする役割となっています。

※ 各漁業の概要やトビウオ通信バックナンバーについては島根県水産技術センターホームページをご覧下さい。
（ http://www2.pref.shimane.lg.jp/suigi/ ）

表1 平成 22 年の県内主要漁業の海区別漁獲量・生産額

漁業種類	海区	漁獲量※			生産金額※			1ヶ統あたり漁獲量※			1ヶ統あたり生産金額※		
		量（トン）	平年比	前年比	金額（百万円）	平年比	前年比	量（トン）	平年比	漁模様	金額（百万円）	平年比	漁模様
すべての漁船漁業	全県	120,743	103%	92%	17,670	88%	92%	—	—	—	—	—	—
中型まき網	石見	6,269	94%	89%	708	79%	85%	2,097	124%	◎	210	97%	○
	隠岐	66,565	110%	93%	3,814	87%	90%	8,321	114%	◎	477	90%	○
小型底びき網1種	石見	5,112	102%	98%	1,794	93%	100%	107	108%	○	37	98%	○
沖合底びき網2そう曳き	出雲・石見	5,159	94%	102%	2,258	87%	101%	637	116%	◎	286	107%	○
定置網 ※※	出雲	3,094	79%	78%	1,260	87%	88%	186	79%	▲	78	87%	▲
	石見	798	72%	85%	236	66%	77%	112	64%	▲	31	62%	▲
	隠岐	1,136	100%	104%	368	105%	101%	279	85%	▲	87	90%	○
釣り・延縄	出雲	821	111%	119%	407	80%	86%	—	—	—	—	—	—
	石見	709	113%	99%	393	80%	76%	—	—	—	—	—	—
	隠岐	337	90%	96%	278	80%	110%	—	—	—	—	—	—
イカ釣り	出雲	733	57%	99%	420	64%	85%	—	—	—	—	—	—
	石見	288	87%	105%	183	75%	82%	—	—	—	—	—	—
	隠岐	359	41%	106%	184	58%	98%	—	—	—	—	—	—

※　漁獲量・生産額は県内全漁協・全経営体が対象。平年比・前年比は一部地区（松江市・湖陵・多伎・温泉津・江津・知夫）と実質的に県外を根拠にしている一部の沖合底びき網漁船を除いた JF しまね主要支所および海士町漁協の数値を元に算出。

平年比：過去 5 年（H17～H21 年）の平均値との比較、沖合底びき網2そう曳きのみ過去 10 年（H12～21年）　漁模様：◎が平年以上、○が平年並み、▲が平年以下

※※1ヶ統あたり漁獲量・生産金額は平成 22 年現在操業中の大型定置のみを対象に算出。